

大豊建設



引き渡しを済ませたばかりの
地下鉄新莊線D工区

大豊建設で初の台湾人現場代理人が誕生した。これまで同社のシールド現場を複数手掛け、2月に引き渡しを済ませたばかりの新地下鉄新莊線D工区でも腕を振るった黄信達工程師。今月から始まった洪水対策用水路のシールド工事を現場代理人として指揮する。黄工程師は「これまでの工事とは、発注者も現場環境も違う。多くの先輩技術者の意見を聞きながら品質の高いものに仕上げたい」と意気込みを見せる。

同社は、台湾に進出した20年以上前から、現地の技術者

現場紀行

世界を駆ける



大豊建設で初の台湾人現場代理人になった黄信達工程師

台湾の技術者はプロジェクトごとに仕事を引き受け、よき条件の良い現場へと渡り歩くのが一般的だという。人脈確保するシステムを構築したの少ない日本のゼネコンが有

自社現場で育成

すのは難しい。

藤井所長は「現在は現場ごとに人脈を頼っている形だが、今後は技術力のあるエンジニアをデータベース化し、プロジェクトに適した人材を確保するシステムを構築したい」と話す。

「大々的に大型工事を受注できるようになったのはここ7年くらいのこと」。藤井所長は振り返る。台湾

初の台湾人現場代理人 シールド工事で腕振るう

や協力企業やスキルアップに力を入れてきた。大型工事を受注できても、優秀な技術者や実績のある協力企業を現地で十分に確保できなければ工事はスムーズに進められない。「どんな工事を受注しても決してあわてない体制が必要だ」と藤井公楯大豊建設台北営業所長は話す。

能な技術者を確保するのに苦戦するケースも少なくない。同社は自社現場で技術者を育成し、引き続き次の現場でも採用していく方法で有能な人材を確保し続けている。それでも、工事の規模や種類に見合った人材を確実に探し出し

事務所開設から四半世紀 パイプと信頼築く

時間感覚にズレ

四半世紀前にさかのぼる。藤井所長はこの時に赴任。同社の台湾事業の歴史とともに歩んできた。現地の発注者や協力企業、技術者との間に太いパイプと信頼関係を築いている。

同社が台湾の現場に配置している日本人技術者は平均して3〜4人。他の日本のゼネコンと比べて少ないのは、優秀な台湾人技術者を数多く確保できるからだという。

台湾では、日本ならトップダウンで決まることも、全員が合意がないと決まらないことが多い。会議で決まったことが、翌日の会議で再び議題に上ることも珍しくないという。作業員や資材が予定通り来ないなど、日本人技術者が赴任すると、まずはこうした時間感覚のズレに悩まされる。

藤井営業所長は「郷に入るとは郷に従え」が海外工事をスムーズに進める秘訣だと話す。